神奈川県考古学会
考古かながわ 第51号

遺跡は誰のモノか－普及啓発の拡充に向けて－

西川修一

文化財の普及啓発・情報公開は、なぜ必要なのか？改めて自問している。広く市民や生徒・児童たちに調査成果や情報を提供することが何故に必要か？そもそも文化財や遺跡は誰のモノなのか？誰のために調査しているのか？

文化財保護の業務、特に情報開示・提供は「理解を得るため」のものでなく、その主目的であると思っている。その受益者は国民であり、情報提供なくして保護行政は成立しないと思う。

貴重な文化遺産の保全や保護が目的なのだから、その情報提供は「副次的オマケ」ではないか。その円滑な運用のために、「広く理解してもらう」、児童・生徒にも大切さをよく知ってもらい、いずれ大人になったら理解者(味方)になって欲しい…これも正論のような気もする。

正論だが、やはり主客転倒である。それは「理解者を得る」とは、やはり事業を順調に進めるためという「動機」に起因している。費用負担など「知らなくてもよいコト」は、情報提供しないという「安易な論理」に結びつきやすい。

ここでは埋蔵文化財保護に絞って話しを進めたい。遺跡調査の仕事に携わっている人たちは、普通は遺跡や、土器・石器が好きである。いくら好きだからといって、遺跡調査は研究者やマニアの興味のためにするのではない。未来に手厚い体制・精密に調査された方が良いに決まっている。また遺跡は「自然と一体化」しているから、破壊しない方が環境にも良い場合が多い。

文化遺産は国民共有の財産で「大切なモノ」であり「私物」ではない。だから行政が公的サービスとして保護している。やむを得ず破壊を免れない時の記録保存もしかりである。「クライアント」は建設・開発事業部局であると勘違いしやすいが、大いなる間違いである。あくまで主体者も、その公的サービスの受益者も「国民・住民」であるはずである。調査費の原因者負担も、「負担者」は国民であることを忘れてはならない。実際、公共事業の調査費は「税負担」だ。

しかし普及啓発の充実と言いつつ、遺跡は「研究者のモノ」で「見せてあげる意識」が拭い切れていない。自分が「好きなモノ」のだから…。

身近な例を挙げる。わが国特有の博物館などでの資料の「撮影禁止」は何故減らないか。また印刷部数減が問題になった報告書だが、その配布が遍く全国の公共機関に行き亘る努力をしたのか？このような「お寒い状況」は、真の受益者を正しく見据えていない証左ではないか？

考古学は延べ「兆円」規模の公費投下の成果をフィードバックしているだろうか？膨大な税金を費やして「遺跡を壊している」のではない…その受益者は誰か？意識しなくてはいけない。

私は公民館などでの考古学講座に呼ばれると、まず「遺跡は誰のモノか？」からお話することにしている。ほとんどの方が「発掘なんてね…趣味と仕事が一緒で羨ましい…」との意識を改め、文化財保護の意義について一緒に考えてくれるよう変化する。普及啓発の拡充…このところ耳にすることが多くなったパブリック・アーケオロジーの議論の行方や、各地での進みつつある報告書リポジトリの取組みに期待したい。

平成25年度第２回見学会参加記

国指定史跡小田原城跡御用米曲輪の発掘調査説明会と小田原城天守閣特別展の見学会に参加して

内藤　和美

11 月 23 日の見学会は晴天に恵まれ、ハイキング日和でした。

説明会場に入るや、目を引いたのがシートの上に置かれたおびただしい数の物干し竿の基部のような形をした四角い石でした。

目玉となった戦国時代の「池の跡」　夥しい数の石塔が湾曲した護岸の部材として用いられている

発掘現場は戦国時代に造られた珍しい池でした。池は水を抜かれた状態で一部は池を造った時の状態がわかるようになっていました。護岸には正方形の石が整然と並べられていました。なんと護岸の四角く見えた石は五輪塔との説明。入り口で見た「物干し竿の台」のような四角い石は池から発掘された五輪塔だったのです。使われていたのは五輪塔の火輪と地輪の部分が使われたようでした。このおびただしい数の石塔を見て権力の強大さを感じました。

天守閣の特別展の見学時間は３０分位でした。私は天守閣に上ったのは初めてでしたので、階段を上り各階ごとの展示を見るには時間が足りませんでした。甲冑、刀剣、古文書等々素晴らしい展示物の数々を再び見学に来ようと思いながら最上階に出ました。最上階は３６０度の見晴らしの良さです。戦

当日は当会会員も含め多くの見学者が訪れた

になると敵の情勢は手に取るように見え、軍事的には良い位置に建てたものだと感心しました。

現在の小田原城跡にある天守閣、常盤木門、銅門、馬出門は昭和 35 年～平成２１年にかけて江戸時代に造られた雛型や引き図を元に復元されたそうです。

敵が橋を渡って銅門に来ると土塀には弓を射る長方形の穴、鉄砲を撃つ三角の穴があり攻撃される仕掛けになっている。門に近づくと頭上からは石が降り、門扉の下からは長刀で足を払われる仕掛けになっている。お城は当時の最高水準で造られた事でしょう。当時のままのでないのが残念でしたが、現代に復元された建築物は見応えがあり、それらを見て色々想像して楽しむことが出来ました。

説明付きの見学会は最新の考古の世界に触れ、情報を得る良い機会となり、これからも時間が許す限り参加したいと思っています。

発掘を担当された小田原市職員佐々木氏の解説に聴きいる参加者

セピア考古学雑記

このコーナーは、神奈川県の考古学の土台を築いた方々の足跡をインタビュー形式で振り返ります。今回は小田原市城内高等学校で教鞭をとりながら神奈川県西部地域を中心に考古学の調査研究に邁進された杉山博久先生からお話を伺いました。

Q　先生の生い立ちをお聞かせください。

生まれは 1937 年、極幼少の頃は葉山に近い逗子にいたんだ。すぐ近くが桜山と (長柄桜山古墳のあたり) いって……。それで国民学校入学を機に小田原に帰ることになった。敗戦を迎えたのが 2 年生の夏。小田原は空襲が少なかったのだけど、警戒警報のなか学校へ行こうとしたら機銃掃射があってね。ダ・ダ・ダ・ダーッと。夢中で近所のうちに飛び込んだ、そんな思い出があるよ。それから、敗戦の直前に小田原城の天守閣―当時は石垣だけの小山―に担任に連れられていってクラス全体の記念写真を撮ったんだよなあ、写真師に頼んで。今でも記憶に残っている。

4 年生の担任の先生が社会科を好きで、今でいう総合学習、自分で課題を決めて調べる授業をしてね。私はそういうのが好きだったから、親父が仕事の関係で持っていた電柱の配置図、青焼きの地図をもらって、小田原中に病院がどんな風に分布しているか一人で歩いて調べてみたり (した) 。眼科とか歯科とか内科とかそういうものの分布を調べてみたよ。ああいう自由に勉強させてくれたから、のちのち自分で問題設定して調べるって癖はついたよね。

そのころ小田原の古本屋で初めて本を買ってもらった (のも覚えている)。『日本史』という本だった。ちゃちな本だったけれどね、初めて自分で行って、(選んで) 買った本だからね。それでも 20 年前まで持っていたものだよ。

(小田原) 城址公園も今みたいに綺麗になる前は本丸下あたりは結構瓦が拾えたんだよ。だから放課後だとかに一人で行って拾ったものだよ。主に軒平、軒丸瓦なんかを集めたんだ。その中にね、瓦師の名前の刻印のあるものがあった。河内だか摂津の銘があって、なぜ関西の名前があるのかって (不思議に思って) 図書館に調べにいったよ。

Q　ご自分で調べにいかれたのですか。

うん、全然わからなかったけどね。当時は歴史学といったら (書籍に書かれるのは) 北条さんのことくらいだからね。だけど思えば、その頃から自分で何か調べることをしていた、後の考古学につながることを自分一人でやっていたのかな (と思う)。

それで無事に 6 年終わって小田原駅の裏、第一中学校 (現在の小田原市立城山中学校) に入学した。当時の第一中学校は小田原高校の予備校的存在でもあったんだ。だけど、校長先生は自分がやりたいことができるとこへ行きなさい、という方だった。(私は) 小学生の時に尾崎士郎の『人生劇場青春篇』を読んでしまったんだ。あれ (舞台は) 本当は経済学部なのだけど、中学行ったころはもう歴史の勉強をしたいと思っていたんだよ。だから将来は文学部って決めていた。とはいえ中学時代はもっぱら勉強より運動が中心だったなあ。野球部で活動しながら陸上の試合にも出ていたりした。

で、高校の時はしばらくバトミントン部にいたけど、じきに歴史部へ入った。歴史部に入ったは良いのだけどね、部員がいないんだよ。このままじゃ廃部になっちゃうっていうんで、大学へ行っている先輩達が歴史部を復活させろ、杉山おまえ頑張れって (言ってね)、部内で作っていた「ふるさと」っていう雑誌があるんだけれど、それを復刊させろ、資金面は俺達がなんとかするからって言って。それじゃあ、っていうんで、その当時万という単位の雑誌つくっちゃたの。

Q　歴史部は由緒ある部だったんですか？

いやね、当時部に小田原市の社会教育課長だった中野敬次郎という先生が (小田原高校に来て) いてね。小田原の歴史家としては大家の先生だった。その先生がいたから … 雑誌作るのに仲間誘ったり一人でねこの辺の寺や神社を廻ったらさ、重要文化財や寺宝を全部見せてくれたんだよ。多分、中野先生の紹介があってからこそだったろうと思うけれど。だけどあれはよかった、良い経験だったよ。…歴史に凝っていたねえ。

―歴史漬けの学生時代

ちょうど私が高校に入った頃旧制の大学を出た人たちが (先生として) やってきて、彼らは自分らが学生時代に楽しかった経験を我々に教え込もうとした (のだろう)。地理の先生は実地調査を教えようとしたし、ちょっと偏向していたけれど日本史の輪読会もやったね。古代史でいうと藤間生大、古代末期が石母田正、中世が松本新八郎、近世近代では井上清に遠山茂樹と。だから私もやっぱり影響を受けているから「日本近代天皇制の成立」なんていう (研究テーマ) で大学 (早稲田大学文学部) を決めちゃってねえ。親には親には何も相談相談ずに。まあ、親も感づいてはいただろうけれどね。当時、史学科だけで 40 人くらいいたかなあ、当時は誰も彼も近現代を希望する者が多かった。だから、私は誰もやろうとしていない古代をやりますって、最初のクラス会の時だかに宣言したんだ。それで古代史の勉強を始めちゃったんだね。

Q　影響を受けた人物、研究者とは。

２年生の時に洞富雄という先生に出会った。私は本が好きだったから学生の時も国史科の先生の本は全部読んでやろうと(思って)、洞先生の著作『日本母権制社会の成立』を読んだ。これが自分にとって(これまで読んできた本と)だいぶ違ったんだな。それで怖いもの知らずにもある時先生をつかまえて先生の本を読んだが、藤間生大の主張と違うじゃないかと言っちゃったんだ。そうしたら先生から、君が本を読んでくれるのは嬉しいけれども、決して君の好きな藤間や石母田の考えで私の考えを批判するな、自分の考えでモノを言え。どんなに稚拙でも幼くてもいいから自分の考えで俺の本を読んで批判してくれと言われたんだ。それで必死になって読んで、原稿用紙30枚くらい書いて持っていった。そうしたら先生は私を家に呼んでくれて私の意見をちゃんと聞いてくれて、最後に、「学問とはそうやって自分で資料にあたって調べて、自分の考えでまとめるものだよ」と、こう言ってくれた。それからは人の意見で戦わせるよりも自分の意見をしっかり持たなきゃいけないんだな、と考えるようになった。あれは２年生の夏前くらいかな。それが大きかったよね。

当時講師だった直良(信夫)先生を紹介してくれたのも洞先生だった。卒業論文をね、古代の灌漑用水でやりたかったから、「日本古代農業発達史」という著書で学位をとられた直良先生に主査をお願いし洞先生は副査をやってくださったんだ。以来、直良先生とは懇意にさせてもらったけれども。

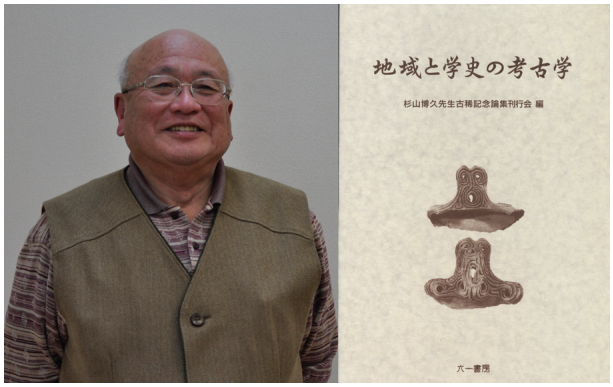
大学院の時は専ら文献だった。本当は西岡虎之助という日本荘園史の先生につきたかったんだが、これも洞先生の命令でね、古文書学が中心の先生の研究室に入ることになった。古文書には興味を持てなかったが、その先生はいろいろ学問面では良くしてくれてね、宮内庁書陵部の史料をみたいっていうと電話してくれてほとんどフリーパス。それに私が勉強やめて小田原に就職しますと言った時には引き止めてくれたし、親を説得しに小田原まで来ると言ってくれたりもした。ただ、研究室には居づらかった。上級生との思想的な主義主張に齟齬があってどうしてもなじめなかった。それで修士で辞めて教員になった。残りたいって気持ちはあったけれどね。

まず義務教育の教員経験を積むのに中学校教員を２年勤めた。野球部顧問として県で準優勝を飾ったりしたが、その後、(県立小田原)城北(工業高校)に赴任した。城北は夜間で校長から昼間は大学へ行っていいと言われて、ちょうど早稲田の東洋考古学の駒井和愛先生も誘ってくれて暫く教室に通ったけれどもやっぱり他の先生の手前もあるし、(自分だけ勉強は)続けられなかったね。それから週に何度か小田原高校に講師で１年半ほど(日本史を教えに)行くことになった。その生徒だった湯川悦夫、内田俊秀、二宮の杉浦健一らが土曜日の放課後や日曜日に遺跡歩きをはじめるんだよな。それで土器片を拾ってきては月曜に教室でテーブルに広げて、「先生これは何？」と聞かれるんだ。仕方がないからこっちも必死になって土器型式を覚えたよ。

―考古学研究の世界へ

教え子達が大学へ行って先生につくようになったら自分はまた古代史をやろうと思っていたのだけれど。ただ昭和40年代半ばでは、相模川から西で考古学をやっている人が本当にいなかった。東の方では赤星(直忠)先生と横須賀考古学会があって、岡本勇さんも居られたけれども。西に行くとね、平塚の日野一郎さんくらい。だから何かあると赤星先生が出て来られていた。そんな中、少しずつ考古学的な調査をしなければいけない状況が(時代的に)生まれてくるんだよね。それで仕方なく自分がやり出した。その頃、県の博物館の準備事務局に居られた神沢勇一さんも博物館を作るために資料収集をしていて、小田原に来た時にはいろいろ教えてもらったりした。それから直良先生。ただ直良さんに考古学を教わったかというとそんなには教わっていないんだよね。直良さんに教わったのは学問する心なんだよね。実際の技術は教わっていない。あとは明治大学とは縁がなかったけれど、大塚初重さんとはすごく親しくしていただいたなあ。

そのうちに城内高校の生徒からも史学科へ行くものが出てきた。私が考古学の話ばかりしてたのかなあ。国学院とか専修とかに進学して。そういう子が出てくると発掘やろうよという話になるじゃない。そうして神沢さんと直良先生に来てもらって。最初にやったのは大井町の山田っていうところだったな。あとは南足柄の馬場遺跡。その辺が古い発掘だね。



左：杉山博久先生近影(2013年12月23日撮影)
右：古稀記念論集『地域と学史の考古学』(2009年刊)

Q　平沢 (同明遺跡) はいつ頃ですか。

平沢は、昭和 42、3 年頃だね。秦野から小田原高校へ来ていた生徒がいて、近くの畑から土器や石器がいっぱい出るよって持ってくる。行ってみたら、本当に落ちている。地主さんにお願いしてちょっとだけ掘らせてもらおうって言って (始めたのが最初だ)。で、まだ出てくるからっていうので早稲田の考古学研究会が手伝いましょうって出てきた時が、あの遠賀川 (式系土器) が出てきた時。あの時は驚きだったんだよ。まさか出るとは思わなかったんだもの。箱根山を越えてるなんてこと誰も考えなかったんだから。で、吾郎ちゃん（平野吾郎氏）とね、いやあ大変なものでてきちゃったなあ、ってね。トレンチの壁際に出たんだよ、あれ。壁の精査をしていたらカッとひっかけたんだ。口縁部が欠けてるだろう？廃土を夢中になって探したのだけれど。精査中の土だからそんなに遠くにいってるはずはないのに見つけられなかったんだよなあ。

あとはねえ、みんなと一緒に掘った根丸島 (遺跡)。根丸島はいい (遺跡だよ) なあ。700 軒からの竪穴が出て、当時としては大変なもんだった。あれの時に来ていたのが柳川 (清彦) に茨城の佐藤正則、あとは山梨帝京 (大学) にいる萩原三雄に曽根 (博明) 君らが現場の大将だったかな。

Q　どこから横穴墓へ興味を持たれたのですか。

横穴の分布が偏っていることに疑問を持った。神奈川県だけではなく、全国的な規模で見てもものすごく偏在性がある。これが何なのだろう何かわからないかと思って横穴墓に興味持った。それで各地の横穴墓の報告に目を通しているうちにできたのが、「横穴地名表」だった（齋藤忠・杉山博久 1983『古墳文化基礎資料日本横穴地名表』吉川弘文館）。それと横穴は調査に金がかからないんだよね。普通包含層だと作物を保証しなきゃならない、そうすると私のボーナスからいくらか出さなきゃならないわけだ。ところが横穴だとそれが要らない。それで横穴に手を付けだしたら、たまたま二宮だとか大磯 (愛宕山、愛宕山下) で調査の機会があって、で、秦野の下大槻に開発が掛かってやって。そんな中で金目川流域をすべて踏破してやろうと思ってね、それを何年かやったよね。とりあえず (横穴の口が) 開いているのを全部実測して歩いて。記録はあるんだよ全部。最初それを本に出したいと思ったんだが大変な金がかかるんでね。齋藤忠先生に相談したらむうっと唸ってたね。それでとりあえず地名表なら活字だけだからといって忠さんが共著者になってくれて吉川弘文館に頼むことになった。あれは誰かに資料を託していきたいなと思っているんだ。(事実記載の) 原稿から何から全部ある、図面も一回全部トレースしてある。後は位置図。場所はもう一度確認しないといけないな。

Q　最後に、今先生が取り組んでおられることは何ですか。

今は考古学史に興味がある。私は本が好きなんだよな。だからありがたいことに考古学書なんかも学生のときからなんとなく集め続けていたんだ。明治、大正、昭和初期の文献は大体集めちゃってある。実は来年、満 (年齢で 77) で喜寿になるからね。それを機会にできたら一冊、出そうかなと考えている。『魔道に魅入られた男たち』のような (いわゆる) 正統派でない研究者をね (とりあげて)。60 になる時にね、人生で 20 人評伝を書こうと決めていたんだが、実はもう 19 人書いてしまった。それで去年急遽 10 人増やしたんだよ。あと 11 人はがんばろうと思っている。

—ありがとうございました。

ご同席いただいた大磯町教育委員会の鈴木一男氏、東真江氏を交えての話はつきず、3 時間 30 分強にわたり興味深いお話をたくさん伺いました。杉山先生の携われた発掘調査や研究活動の逸話の数々はわずか数頁ではとてもまとめきれません。調査研究に関しては 5 年前に刊行された先生の古稀記念論集に杉山先生ご自身を含め多くの研究者による様々な論考が寄せられています。ぜひご覧になってみてください。

【用語解説】

●狩野馬場遺跡（かのばっぱいせき）
南足柄市狩野所在の縄文時代後期の大集落遺跡。

●平沢同明遺跡（ひらさわどうめいいせき）
秦野市の弥生時代の遺跡。昭和 42 年に発掘調査が行われ、土器棺墓に使用されていたと考えられている弥生前期壺形土器（遠賀川式系壺型土器）が出土したことで知られる。

●遠賀川式系壺型土器（おんががわしき）
福岡県遠賀川下流の川床で採集された弥生式土器と共通した特徴を持つ土器を総称し、遠賀川式と呼ぶ。平沢遺跡出土の土器は、その特徴から伊勢地方で作られた可能性が強く、農耕文化の伝播に伴って当地域に持ち込まれたと考えられている。南関東地方唯一の完形の遠賀川式系壺形土器として県重文に指定。

●根丸島遺跡（ねまるじまいせき）
伊勢原市台地上に所在する弥生時代中期から平安時代頃の遺跡。発掘調査により 701 軒の住居跡が出土した。現在、遺物は桜土手古墳展示館にて保管。

大地の一頁

南関東で最初の本格的稲作農耕集落
～小田原市中里（なかざと）遺跡～

（株）玉川文化財研究所　河合 英夫

中里遺跡は、神奈川県の西部、足柄平野の南東、酒匂川と、その東を流れる森戸川とにはさまれた、現在の海岸線から1.5kmの沖積微高地に立地する。

遺跡発見の経緯は、昭和27年の大同毛織小田原工場の建設時にまでさかのぼる。最初に石野瑛氏に次いで杉原荘介氏による調査が行われ、南関東における宮ノ台式に先行する古相の土器を出土する遺跡として注目された。その後、杉原調査資料の検討をもとに、神沢勇一氏によって相模湾地域の須和田式並行型式として中里式が提唱された。

本格的な発掘調査は、大同毛織小田原工場跡地一帯の再開発に伴うもので、平成3年に第Ⅱ地点、翌4年に第Ⅲ地点、平成10年から12年に第Ⅰ地点、13年から14年に第Ⅴ地点が発掘調査された。

第Ⅲ地点の調査では中期中葉の中里期に属する県内最古の方形周溝墓群が発見され、溝の四隅が切れることから伊勢湾地域との関係が指摘され、中里遺跡が注目されるきっかけとなった。

この第Ⅲ地点は墓域であったことから、近隣に居住域の存在が予想された。その後、第Ⅰ地点の調査により大規模な集落跡の存在が確認された。この発掘調査により、それまでの常識を覆すような遺構や遺物が次々と現れたのである。

湾曲して蛇行する旧河道と区画溝とに囲まれた範囲からは、100棟を超える竪穴住居、73棟もの掘立柱建物、西日本ではよくみられるが関東ではきわめて希な井戸の存在や、様々な形態の土坑が800基以上も発見された。また旧河道と区画溝は、集落を取り巻く環濠の役割を果たしていたのではないかと考えられる。居住域は第Ⅰ地点のさらに東および南方向に広がるとみられ、居住域は東西240 m、南北200 mの範囲と推定される。

中里遺跡第Ⅰ地点の全景（空撮）※右端が北

全体ではおおよそ約4万㎡前後の規模を有する巨大集落が今からおおよそ2,200年前の弥生時代中期中葉の中里期に突如姿を現したのである。

これまで、弥生文化を特徴づける要素として、水田・環濠集落・方形周溝墓、大陸系磨製石器、金属器という要素が出揃うのは、南関東では中期後半の宮ノ台期からとされてきた。しかし中里では環濠と金属器はなかったが、他の要素は保持しており、西日本と同じような本格的な水稲耕作を行っていたことが判明したのである。

海岸線に近い平地には、多数の竪穴住居や掘立柱建物、井戸、中心部には神殿を思わせるような大形の独立棟持柱建物が建ち、集落の東には水田（第Ⅱ地点）が広がり、南東側の墓域（第Ⅲ地点）を加えると優に10万㎡以上に及ぶとも考えられ、西日本の集落景観を彷彿させるものであった。

以下では、集落の立地や規模、遺構群の構成、遺物などを紹介し、今後の議論の糧としたい。

集落立地と規模　低地に集落を構える例として中里の例は東日本では特異であるが、西日本では一般的で、その成立には西日本的な影響があると思われる。水稲耕作の条件となる平野部の低地を、最初から選んだものと考えられる。また、明確な環濠こそないが、旧河道と溝により環濠の役割を果たしていたとみられる。集落の全容を解明するには、南側と東側の調査が必要であるが、旧河道と溝で区画されていたとすれば居住域の面積は、おおよそ4万㎡内外であったと考えられる。

遺構群の構成　旧河道と溝で区画されていたとみられる内部には、竪穴住居 102 棟、掘立柱建物 73 棟、井戸 6 基、土坑 800 基以上が発見された。居住域は全体で 4 万㎡前後と推測されるが、その規模は宮ノ台期の一般的な環濠集落と比べても、桁外れに大きかったことがわかる。

竪穴住居の分布状況からみると、旧河道と溝で区画された範囲に収まる。近接するものや住居間の重複関係から 3 時期に細分される。掘立柱建物と重複も少ないことから両者は一定の家地空間を取っていたとみられる。住居群の配置は、攪乱の影響もあり視覚的な域を出ないが、サークル状に配された 10 数棟の竪穴が 5 群ないし 6 群集まって一つの集団を形成していたよう思われる。住居間の重複などから仮に 3 時期の変遷を想定すると、各群は一時期 5 ないし 6 棟前後の住居で構成されていたとみられる。単純に 100 棟を 3 時期に区分すると、30 数棟の住居が同時期に存在していたと推定される。個々の住居の特徴では 8 mを超える大形住居は全体の 1 割で、群単位に認められる。住居の平面形は隅丸方形や楕円形が多かったが、西日本に多い円形のものも多少認められた。

掘立柱建物は大小合わせて計 73 棟発見された。竪穴と掘立の比率は 6 対 4 で、この比率も極めて特異な現象であった。中里遺跡では竪穴と同様に居住域に平均的に分布し、多くは竪穴に付随することから、小型の建物は高床倉庫と考えられる。その中で居住域の中心で発見された 20 号建物は、独立棟持柱構造の建物で、大阪府池上曽根遺跡の神殿風の建物を彷彿させるものであった。規模は桁行 7 間 (10.5 m)、梁行 2 間 (4.5 m) の身舎に、両妻側に廂が付き、両妻中央の外側に独立棟持柱が配されるもので、弥生中期中葉のものとしては群を抜く大きさである。このような工法の掘立柱建物は西日本ではみられるが、東日本では極めて異例で、特殊な構造であることから儀式や集落の中心的な人物の住居など特別な建物とみられる。これも西日本からの外来的要素と考えられる。

出土遺物　竪穴住居、土坑、井戸、旧河道などから出土した。最も多かったのが土器で、次いで石器類、農耕具などの木製品、紡錘車、炭化米、種子類、獣骨類なども出土した。土器類の多くは在地の中里式であるが、他地域の土器も含まれていた。近いところでは埼玉や北関東方面のもの、あるいは静岡東部・西部のもの、愛知・岐阜周辺、東部瀬戸内地域、中部高地、北陸、南東北などの遠隔地からもたらされた土器も含まれていた。

遠隔地の中でも東部瀬戸内の土器は他の地域の土器よりも纏まって出土した。全体の 3 %を多いとみるか、少ないとみるかはそれぞれであるが、個体に換算すると約 100 に近い数となる。中里の始まりに多大な影響を与えたと思われる。現在の兵庫県明石市周辺で、畿内第Ⅲ様式前半の土器に対比できるという。

石器類では、大陸系磨製石器群と呼ばれる各種の石斧やその未製品。これらで木製農工具を製作していたのである。この他に石鏃や穂積具、石皿、磨石、敲石、砥石、黒曜石の剥片類も出土した。また西日本産と考えられるサヌカイト製の石鏃や打製石剣なども発見されている。

まとめ　遺構・遺物の示す内容は、中里遺跡の成立の背景を如実に語っているものと思われる。第一は革新的な稲作技術と、それに伴う集落形態。後者には環濠の役割を果たした旧河道や区画溝。居住域を構成した多数の竪穴住居や掘立柱建物。そして井戸や土坑。中央に建てられた長大な掘立柱建物。方形周溝墓群からなる墓域。遺物では、遠隔地からもたらされた土器や大陸系磨製石器、打製石剣。木製農工具。中里集落の成立を考えるとき、在地の人々と彼の地からきた人々が中里の地で集住してつくったのが中里集落であろうが、本格的な稲作農耕社会を取り入れた成立の背景をもっと具体的に説明をする必要があろう。在地との融合を経て、相模各地の河川流域に水稲耕作を中心とする農耕社会が広がっていくことになる。

なお、遺跡そのものはすでにないが、ショッピングセンターの一角に「中里遺跡ポケットパーク」として竪穴住居址の模型が展示してある。

神奈川県考古学会　平成 25 年度考古学講座

「時空の交差点～遺跡の保存と活用～」

開催のお知らせ

遺跡の保存と活用は、テーマとしては決して新しくありません。
そして、今後も常に課題がつきまとうテーマといえます。
2014 年の今、数百年から数万年前の埋没したはずの空間が現出する様は、
時間と空間とを超え、現在と交わるいわば「時空の交差点」のような存在なのかもしれません。
遺跡の保存と活用について、今どのような活動が行われているのか、
これからどのような展開ができるのかについて考えてみます。

当日のプログラム：

AM
開会の挨拶
趣旨説明
1.　田名向原遺跡 (神奈川県相模原市)
2.　三殿台遺跡 (神奈川県横浜市)
(昼休憩)

PM
3.　下宅部遺跡 (東京都東村山市)
4.　永福寺跡 (鎌倉市)
5.　旧相模原橋脚ほか (茅ヶ崎市)
6.　パネルディスカッション
閉会の挨拶

開催日：2014(H26) 年 3 月 16 日 (日)
時　間：9:50～16:30 ※受付は 9:30 からです。
会　場：横浜市歴史博物館　講堂
会　費：無料　※資料代実費
主　催：神奈川県考古学会
問合せ：soumu@koukokanagawa.net
※会場となる博物館へのお問い合わせはご遠慮ください。
最寄駅：横浜市営地下鉄「センター北」駅

第 27 回考古資料展
伊勢原の遺跡「発掘調査の現場から ...」

会　期：2/14(金)～2/16(日)
時　間：9 時～17 時
※初日は 10 時～最終日は 16 時まで
場　所：伊勢原市立中央公民館
3 階会議室 B、同 1 階展示ロビー
内　容：伊勢原市内の発掘調査の成果を出土資料や写真パネルで展示・公開 !!
主　催：伊勢原市教育委員会
共　催：(公財) かながわ考古学財団
問合せ：伊勢原市教育委員会文化財課
☎　：0463-94-4711(内線 5216 他)
※申込不要／入場無料
HP：http://www.isehara.kanagawa.jp/bunkazai/joho/event.htm

えびな文化財探求舎講演会
「相模国分寺の瓦を学ぶ」

開催日：3/2(日)
時　間：13 時 30 分～17 時
場　所：海老名市役所 4 階 401 会議室
内　容：海老名市のシンボルである国指定史跡相模国分寺跡について、近年他市町村での発掘調査結果から新たな知見が得られています。これらの成果を広く皆様に知っていただくために講演会を開催いたします。
講師：横須賀市教育委員会　中三川昇氏
(公財) かながわ考古学財団　高橋香氏
申込み先：海老名市教育委員会
教育総務課　文化財課係
☎　：046-235-4925　(直通)
定　員：100 名 (要事前申込)

小田原市遺跡見学会
「天神山周辺の原始・古代の遺跡」

開催日：3/30(日)
時　間：9 時～12 時
集　合：小田原市駅西口
解　散：小田原市郷土文化館
内　容：小田原市南町一丁目、山角天神社周辺の丘陵上に残された遺跡を文化財課職員の案内のもと巡ります。春の陽気を感じながら遺跡探訪に出掛けましょう !!
問合せ：小田原市文化財課窓口または電話
☎　：0465-33-1715 (直通)
〆　切：3 月 2 8 日 (金)
※小雨決行
※歩きやすい服装でお越しください。
特　典：参加者に遺跡紹介冊子を無料配布

(巡回展)
地中に埋もれた江戸時代の道具たち
―かながわの町と村の暮らしぶり―

会　期：3 / 1 (土)～3/23(日)
時　間：9 時～17 時
※月曜休館、入館は 16 時 3 0 分まで
会　場：秦野市立桜土手古墳展示館
入場料：無料
主　催：神奈川県教育委員会、秦野市教育委員会
展示解説：申込不要
第 1 回　3/8(土)13 時 30 分～16 時
第 2 回　3/21(祝)13 時 30 分～16 時
問合せ先：秦野市生涯学習課文化財班
(秦野市立桜土手古墳展示館内)
☎　：0463-87-5542

編集後記

2013 年度第 2 号となる 51 号をお届けいたします。今号は、来月開催される講座テーマに沿って「文化財の保存と活用」を題材に西川修一さんから巻頭言をいただきました。セピア考古学雑記では、小田原を拠点として活躍されてきた杉山博久先生にお話を伺いました。今号では見学会記に小田原城御用米曲輪の現地説明会、大地の一頁には小田原の中里遺跡と、小田原づくしの号となりました。ご寄稿戴きましたみなさま、またインタビューにご協力戴きました杉山博久先生、大磯町教育委員会の鈴木、東両氏にこの場を借りてお礼申し上げます。

考古かながわ　第 51 号

発　行　神奈川県考古学会
発行日　2014 年 2 月 20 日
編　集　連絡誌部会：桑原・高橋・古田土
印　刷　(有) 湘南グッド
発行者　神奈川県考古学会　会長　岡本孝之
郵便振替　00240-9-71208
E - mail　soumu@koukokanagawa.net
U R L　http://www.koukokanagawa.net